The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	现代汉语程度副词的体系研究
Author(s)	畢, 鳴飛
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88123
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（畢　鳴飛　　）	
論文題名	现代汉语程度副词的体系研究 （現代中国語における程度副詞の体系的研究）

論文内容の要旨

本論は、程度副詞のケーススタディーを通じて、新たな程度副詞の体系観 を提案することを目的としている。既存の程度副詞の体系は中国語教育や中 国語の研究の需要に応じられないことが多い現状にある。理由として、程度量に基づく細分類は各程度副詞の違いの究明に機能しないことがあげられる。 したがって、本論では従来の程度量による分類方法を取らず、問題点が残っている程度副詞“真”“好”“挺”“怪”“比较”“稍微”“很”のケーススタディーを通じて、各程度副詞の特徴を把握し、新たに研究と教育に役立つ程度副詞の体系観を提案することを試みた。

本論は序論を除き、全６章から構成されている。

第1章では、主に研究背景、問題提起、研究方法、研究目的と意義及び 本研究の独創性について述べた。

第2章では、程度副詞“真”および“好”を分析した。第1節では、“真”が程度副詞であることを証明し、“真”の意味は「直接証拠性」と「確認」を指摘した。第2節では、“好”と“真”の文法的類似性を指摘した上で、両者の違いは“好”は単なる「直接証拠性」の表しで聞き手の存在を要求しないに対し、“真” は「直接証拠性」の他に、「確認」の意味合いもあることで聞き手の存在を必要とすることを指摘した。

第3章では、程度副詞“挺”および“怪”を分析した。“挺”と“怪”はともに 「反期待」の意味を持ち、両者の違いは「反期待の視点」によるものであり、“挺”は話者と聞き手の両方の視点の期待も反することができることから、日常的挨拶では多用されることになったことを指摘した。

第4章では、程度副詞“比较”および“稍微”について考察を行った。両者は 「相対的程度副詞」と分類されていたが、本論では、両者とも典型的な相対 的程度副詞ではなく、“比较”は特定な比較対象を取ることができず、話者の視 点も含まない「客観表現」であり、“稍微”は単独で性質形容詞と共起できず、代わりに動詞とよく共起し、一般的な程度副詞の「静的程度性」ではなく、「動的程度性」を持つことを指摘した。

第5章では、程度副詞“很”について考察を行った。“很”は従来、文法化により程度性は薄れていたことを指摘されていたが、本論では“很”の程度性は薄れていないことを主張し、“很”の意味は“[+通比性]”にあることを指摘した。

第6章では、各章の考察をまとめた上で、本論における程度副詞の体系観―『「比較基準」を軸に、「程度性の曖昧さ」を強調し、程度の大きさによる細分類をせず、各程度副詞の特徴を総合的に把握し、単語ごとの分析を行うこと』を提案した。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　畢　鳴　飛　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教　授	古川　裕
	副 査　准教授	鈴木慎吾
	副 査　准教授	王　周明
	副 査　教　授	林　初梅
	副 査　准教授	中田聡美

論文審査の結果の要旨

≪现代汉语程度副词的体系研究≫（現代中国語程度副詞の体系研究）と題する本論文は、現代中国語で無反省に“程度副詞”と見なされてきた語のうち代表的な７語をケーススタディとして取り上げて、各語それぞれの語用論的な特徴を究明し、新たな程度副詞の体系観を打ち立てようとした秀逸な研究成果である。従来の中国語副詞研究に新たな角度から切り込み、理論文法と教育文法の両面において新たな知見を提出し、今後の中国語の研究と教育を確実に一歩進める研究成果であると高く評価できる。

本論文の構成は以下の通りである。

第1章「程度副詞の研究概要」では、研究背景、問題提起、研究方法、研究目的と意義、および本研究の独創性を述べている。

第2章「直接証拠性」では、現代中国語の“真”と“好”を比較対照して分析している。両者は文法的に類似するが、“真”には「直接証拠性」と「確認」の意味合いがあり、聞き手の存在を前提とするのに対し、“好”が有するのは「直接証拠性」のみで「確認」の意味合いが備わっていないことを明らかにしている。これによって、聞き手を想定しない独り言や咄嗟の反応で“真”ではなく“好”が使用されることを合理的に説明できる点は評価できる。

第3章「反期待性」では、現代中国語の“挺”と“怪”を分析している。両者の共通性は「反期待性」を共有する点に由来するが、話し手側の反期待しか表わさない“怪”と違って、“挺”は話し手と聞き手の両方の期待に反することができると述べている。これによって、日常的な挨拶のやり取りで“挺”が多用されることを合理的に説明できることも評価できる。

第4章「比較と程度」では、現代中国語の“比较”と“稍微”を分析している。両者はこれまで「相対的程度副詞」と分類されてきたが、本論文ではこの見方を覆して、“比较”は特定の比較対象を取ることができず、話者の視点も含まない客観表現であるとしている。一方の“稍微”は単独では性質形容詞を修飾できず、数量表現を求めること、また数量表現を伴った動詞ともよく共起することを根拠に、「動的な程度性」を持つ副詞であると指摘している。

第5章「通比性」では、現代中国語で最も常用される副詞“很”について考察している。これまで“很”は文法化を経て程度性が希薄になっていると説明されてきたが、この通説に対して本論文では“很”の程度性は薄れていないことを主張し、「通比性」という概念を援用して説得力のある考察を行っている。

第6章「結論」では、この研究で得られた結論をまとめて、本論文における程度副詞の体系観、すなわち程度差による再分類をするのではなく、各副詞の特徴を統語と語用の両面から総合的に把握し、各語ごとの分析を行うべきことを提案している。

本論文は上述のように、これまで程度のスケールの高低にばかり注目されがちであった程度副詞に対し、語用論的な角度からそれぞれの特徴を明らかにしようとした意欲的で斬新な研究である。理論文法のみならず教育文法においても価値のある結論を提出したことは高く評価することができる。

本論文は先人の蓄積した研究を引き継ぎ、乗り越え、論理的に考察を進めた優れた研究成果であり、本審査委員会は全員一致で本論文が博士（言語文化学）学位を得るにふさわしい論文であると評価した。